

こんにちは!

村立東海病院



「たかが気管支喘息、されど気管支喘息」 ～小児気管支喘息は“あなどれない病気”です～

【気管支喘息ってどんな病気?】

気管支喘息^{ぜんそく}は、子どもから大人までかかる人がいる病気で、基本的には気道の慢性的な炎症です。風邪やアレルギー(アレルギーの元となる物質)にさらされるなどのさまざまな誘因によって、気管支周囲の筋肉が収縮し、気道粘膜の浮腫(むくみ)や気道への分泌物が増えることによる気流制限*が引き起こされることで、喘息の症状が起きてしまいます。

日本国内では小児喘息の管理や標準的な治療の定着により、喘息死は激減し入院数も減少傾向にあり、小児喘息患者のQOL(生活の質)が保たれつつあります。一方で完全には喘息死をゼロにすることはできず、管理や治療が確立されつつある現在でも、毎年小児は数件程度の喘息死があるのも現状です。

※気流制限とは…空気の流れが制限される状態のこと。

【成人は重症化することも…】

小児喘息の多くは寛解・治癒に至らずに成人に移行する疾患でもあります。小児の気管支喘息と違い、成人では慢性化し気流制限が不可逆性になり、気道の壁が変化し、厚くなったり線維化が進んだりすることが起こりやすく、臨床的に慢性重症例が多いことが知られています。成人の喘息死も管理薬や治療薬が増えつつあり、徐々に減ってきていますが、60歳以上では喘息死亡率は上昇しています。

お子さんやお孫さんの気管支喘息をしっかりと寛解・治癒まで導いてあげることで、成人以降も呼吸器系のトラブルを減らしていけるため、日々、症状のコントロールに気を付けましょう。

【喘息発作を起こさせないために】

喘息は気道炎症を抑制し、気道過敏性の正常化を図ることで予防していきます。

薬物療法は、重症度を判定して、対応する治療ステップの基本治療から開始していきます。治療は、長期管理薬(コントローラー)と発作治療薬(リリーバー)を適宜併用しながら行います。

また、環境因子への対策もとても重要です。昨今では、室内の密閉化や冷暖房化、カーペットの多用、大掃除がないこと、窓の開閉が少ないこともあり、ダニを含めた吸入アレルギーやたばこの煙などからの回避も重要です。

そのほかにも、犬や猫などの動物の毛や、お子さんの大好きなぬいぐるみなども、症状を悪化させるリスクとなるため、定期的な洗濯や天日干しが大事です。

大人になってからも喘息に悩まぬよう、小児期から治癒を目指していきましょう。

薬による治療のほか、リスクを取り除くことも大切です!



村立東海病院小児科医 須藤俊佑

【問い合わせ】村立東海病院 (☎282-2188)、地域福祉課地域福祉・地域医療推進担当 (☎282-1711 内線1132)